

論文の内容の要旨

論文題名(両端揃え)

Predictors of outcomes following percutaneous mechanical thrombectomy in patients with acute ischemic stroke -Comparisons between the home discharge group and hospital transfer group- (急性期脳梗塞患者の経皮的脳血栓回収術後における転帰予測因子-自宅退院群と転院群の比較-)

掲載雑誌名(巻・号・頁・掲載年)

THE SHOWA UNIVERSITY JOURNAL OF MEDICAL SCIENCES

保健医療学研究科保健医療学専攻 精神障害リハビリテーション領域 青木 啓一郎

内容要旨(両端揃え) 600字以内

【目的】急性期脳梗塞患者で経皮的脳血栓回収術を施行した者が自宅に退院可能となる予測因子を明らかにすることである。

【方法】2014年4月から2018年12月において、昭和大学江東豊洲病院脳神経内科に入院した急性期脳梗塞患者のうち、経皮的脳血栓回収術を施行した入院患者99例を対象とした。なお、99例のうち退院先が自宅の者32例、退院先が他院の者67例であった。調査項目は、年齢、性別、同居・仕事の有無、血清アルブミン値、意識障害の有無、最重症時および術後24時間経過時のNational Institute of Health Stroke Scale (以下、NIHSS)、上肢・手指・下肢Brunnstrom recovery stage (以下、BRS) 経口摂取の有無、食事・整容・トイレ動作・歩行における自立・非自立、高次脳機能障害の有無とし、経皮的脳血栓回収術後3日以内にカルテより後方視的に収集した。

【結果】2群間の属性の比較では、意識障害の有無、最重症時および術後24時間経過時のNIHSS、上肢・手指・下肢BRS、経口摂取の有無、食事・整容における自立・非自立、高次脳機能障害の有無で有意差が認められた ($p < 0.05$)。多重ロジスティック回帰分析の結果、有意な退院先の予測因子は術後24時間経過時のNIHSS (OR : 1.35, 95%CI : 0.152-0.448)、経口摂取の有無 (OR : 10.46, 95%CI : -2.252 to -0.095) であった。

【結論】本研究から抽出された術後24時間経過時のNIHSS、経口摂取は安静度が低くても評価できるものであり、転帰予測を行うのに、有用な評価指標になり得ることが示唆された。